

ひろげよう 支え合い・助け合い つなげよう ゆにふあんで!



▲ サッカーの試合会場やイベント会場などでフードドライブを実施

「ゆにふあんに登録し、どのようなメリットを感じていますか？」
鍋田 自前の広報だけではローカルレベルに終始しがちなところ、ゆにふあんによって広く伝えることができます。他の登録団体から活動のヒントを得ることも多いですね。欲を言えば、もう少し「いいね！」が欲しい。ゆにふあんアワードなどの表彰制度があると、

歪みの是正を提言できるのは労働組合だからこそ

強さです。昨年サガン鳥栖のファン感謝デーでフードドライブを実施したときは、選手がブースに来た途端、長蛇の列ができました。
鍋田 SNSのフォロワー数も桁違いです。今回のフードドライブも、公式Twitterで告知してくれて嬉しかったですね。

「ゆにふあんに登録し、どのようなメリットを感じていますか？」
干潟 地域共助が進み、私たちがいなくても助け合いの仕組みが出来上がるのが究極の理想です。近々のところでは食育の充実をはかりたいですね。子どもたちが炊きをおぼえ、自炊を体験する機会をつくれたらと考えています。

「ゆにふあんに登録し、どのようなメリットを感じていますか？」
干潟 地域共助が進み、私たちがいなくても助け合いの仕組みが出来上がるのが究極の理想です。近々のところでは食育の充実をはかりたいですね。子どもたちが炊きをおぼえ、自炊を体験する機会をつくれたらと考えています。

「ゆにふあんに登録し、どのようなメリットを感じていますか？」
干潟 地域共助が進み、私たちがいなくても助け合いの仕組みが出来上がるのが究極の理想です。近々のところでは食育の充実をはかりたいですね。子どもたちが炊きをおぼえ、自炊を体験する機会をつくれたらと考えています。

活動体験記

フードドライブ In 駅前不動産スタジアム

サガン鳥栖のJリーグ公式戦が行われた取材当日、スタジアム前の広場にはフードドライブのブースが設置されました。朝からの雨も開場と同時に小降り。食品を持ち寄るユニフォーム姿のサポーターと、対応するボランティアスタッフの自然な笑みがこぼれる姿が印象的でした。調味料やレトルト食品、お菓子などが112点、25kg集まりました。



食品を寄付された方

ネットで買って食べきれずにいた限定品のお菓子を持参しました。試合のついでに参加できるのが嬉しいです。



食品を寄付された方

子どもが独立して食べ物も余りがち。フードドライブがある日はいつも、ストックを調べてから家を出ます。



食品を寄付された方

「少なくともいいのかな？」と躊躇していたのですが、こうしたイベントがあると知って、今後は気軽に持ち寄りたいと思いました。



学生ボランティア

相原さん・東原さん
(佐賀女子短期大学)

ボランティアは初めて。食品を提供して下さる方々のやさしい心に触れると、あたたかな気持ちになります。



ボランティア

熊本貴子さん
(佐賀女子短期大学講師)

勤務先の短大は福祉や地域の学科がメイン。「フードバンクさが」の取り組みは、親和性が高いと感じています。



株式会社サガン・ドリームス

井上裕介さん
(営業本部 社会連携担当)

ホームゲームやファン感謝デーでのフードドライブを支援しています。来場者と地域をつなげる場として、これからも一緒に共助社会づくりをしたいですね。

「まだ食べられる」から始まる

助け合いの地域社会づくり

助け合える地域を築くため
フードドライブに力点

「フードバンクさが」について教えてください。

干潟 佐賀県初のフードバンクとして、2019年に設立しました。フードバンクは食品ロスや貧困の解決策として注目されていますが、私たちはさらに一歩踏み込んだビジョンとして、「共助社会の実現」を掲げています。

活動の特徴は？

干潟 ひとつは「フードドライブ」です。企業活動の中で発生する食品を活用する「フードバンク」よりも、各家庭で眠っている食品を持ち寄る「フードドライブ」の活動を実施することで、地域に住む一人ひとりの小さな支援が誰かに届く体験から助け合いの風土を築いていきたいと考えています。お預かりした食品のおよそ6割は、子ども食堂や児童養護施設などの団体に寄贈しています。

もうひとつは食育です。地域の子どもたちと一緒にサツマイモを育てたりすることで、子どもたちが畑から食卓、そして大地をめぐる食の循環を実感し、生産者と心が通い合う関係を築けるような機会づくりをしています。

新型コロナを機にニーズ拡大
プロスポーツの拡散力に期待

年間取扱量はどれくらいですか？

干潟 「フードバンクさが」を設立した時点では、県内で「フードバンク」や「フードドライブ」という言葉は、ほとんど知られていない状況でした。

鍋田 しかし翌年以降は、新型コロナウイルスの影響で、子どもがいる家庭に限らず支援を必要とする人が急増しました。2019年度に支援いただいた食品の取扱量が3.5トンだったのに対し、現在は年間約45トン、延べ900強の団体、およそ3万3000人に寄贈しています。

「スポーツチームとの連携も盛んですね。」

干潟 県内にはJリーグのサガン鳥栖のほか、BリーグやVリーグのチームがあり、それぞれ積極的に地域交流をはかっています。サガン鳥栖との連携も、運営会社（株）サガン・ドリームスの井上裕介さんが、「一緒に始めましょう！」と、熱心に進めてくださったのがきっかけでした。改めて感じるのはスポーツの力



▲ フードドライブの仕組み

